

令和元年度 第2回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和元年11月6日（水）13時30分～15時00分
- 2 場 所 みんなの森 ぎふメディアコスモス かんがえるスタジオ
- 3 出席者 柴橋市長、早川教育長、横山委員、足立委員、武藤委員、伊藤委員
- 4 招聘者 東京大学大学院教育学研究科 教授 牧野 篤 氏
- 5 傍 聴 一般6名、報道関係者5名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議「子どもを守り育てる地域の教育力について」
 - ①招聘者説明
 - ②事務局説明
 - ③意見交換

7 議 事

(13時30分開会)

○田中事務局長

定刻となりましたので、ただいまから、令和元年度第2回岐阜市総合教育会議を開会します。本日、司会を務めさせていただきます、教育委員会事務局長の田中啓太郎です。どうぞよろしくお願いいたします。以後、着座にて進行させていただきます。

本日は、市長、教育長及び教育委員会委員4名の出席をいただいております。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。また、招聘者として、東京大学大学院教育学研究科教授牧野篤様にご出席をいただいております。なお本日は、小中学校の校長、庁内から市民参画部や企画部の職員も出席させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第に従いまして、まず、柴橋市長より挨拶をいただきます。

○柴橋市長

皆様、こんにちは。本日は、令和元年度第2回岐阜市総合教育会議ということで、教育委員の皆様方、お忙しい中ご出席を賜り、ありがとうございます。また、牧野先生にも東京からお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

今日は、子どもたちをまさに地域の力でどう育てていくかという重要なテーマでございまして、私も幼い頃を思い出しますと、そういえば地域の同級生のお父さんにいっぱい野

球でノックをしてもらったり、地域の駄菓子屋に行けば、上の世代のお兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒にわいわい賑やかであったなど、地域の中に多様なコミュニケーションが存在していたというのが、私を含め、幼い頃の原体験であります。

今日、少子化の時代で地域の核家族化が進み、隣同士の関係をはじめ、色々な繋がりが希薄化してきている中で、地域の力をもう一度、子どもたちの教育のためにどう生かしていただくかということが、重要なテーマになろうかと思えます。今日は先生から、そういったことを含め、ご示唆をいただければ大変ありがたいと思えます。先生のスケジュールも非常にタイトでございますので、私の意見は、意見交換の際に十分述べさせていただくこととし、今日の会議が実りあるものとなることを願い、私の挨拶とさせていただきます。本日は、よろしくお願いたします。

○田中事務局長

ありがとうございました。次に、次第2「子どもを守り育てる地域の教育力について」の協議でございます。本日は、まず牧野教授より、お手元の資料1に基づき20分ほどご説明をいただきます。引き続き事務局から、資料2につきまして5、6分ほどのご説明を申し上げたいと思えます。

それではまず、牧野教授よりご説明をお願いいたしますが、教授におかれましては次のご予定の関係で、ご説明の後、ご退席となります。それでは、よろしくお願いたします。

○牧野教授

本日は、このような機会を設けていただき、どうもありがとうございます。また、先ほどお話ございましたが、別予定のため、説明の後、退席させていただくこととなり恐縮でございますが、何卒よろしくお願いたします。

それでは早速ですが、私のほうから話題提供という形で、お話をさせていただきたいと思えます。お手元にパワーポイントの資料が配られておりますが、子どもを守り育てる地域の教育力についてということで、幾つかの大きな社会変化をベースにお話をさせていただきながら、今後地域でどのような形で子どもに関わったらよいのかについて、お話できればと思っております。

まず、最初に、国の教育政策の動向ですが、ここ5、6年で、大きく動き始めています。話題になっている大学入試の英語の民間試験延期についての議論も当然入ってくるわけで

すが、中央教育審議会から、2015年12月、現在各地で展開されているコミュニティ・スクールを努力義務化し、全面展開するという方針が示され、さらに昨年12月、社会教育に関して「開かれ、つながる社会教育」という形で、社会教育施設を一般行政に特例的に移管することについての答申が出されました。地域と学校を強く連携させる、従来は学校を中心に、地域が学校を支えるという形で政策が形成されてきましたが、今後は地域と学校が一緒になって子どもたちを育てていく、その過程で、地域も住民自身が自主的に治めて、財政負担等も減らしていくという方向性が、強く打ち出されたという形になります。

その大きな背景としまして、1つは人生100年時代がやってきているということです。日本は世界に冠たる長寿国です。少子高齢化と人口減少が同時に起こり、今後、数年後には毎年100万人単位で人口が減っていく時代となります。ただし、高齢化率は約4割で高どまりし続けるということが予測されており、一方で寿命がどんどん延びていく社会になります。その過程で、人々の生活のあり方も、従来のようにみんなが同じように学校へ進学し、新卒一括採用で企業に就職して、定年で退職して、年金生活を送るというようなあり方ではなくて、むしろ人々それぞれが様々なステージを踏んで、自分の人生を創っていくように変わっていくと予想されています。60歳や65歳で定年となっても、まだ30年、40年という時間が残っており、これを老後や余生と言えるかということ、もはやそうではないだろうということです。その意味では、一人ひとりの幸せを考えても、生きがいを持って生きられるような社会をつくっていく必要があるだろうということで、それを学校教育のあり方にも視点として落とし込みながら、子どもたちが生涯学び続ける力をつけること、そして、その中で自分の人生を設計し、生き抜いていけるような教育の仕組みに変える必要があるということで、議論が進められてきております。

現在の社会は少子高齢化、人口減少ということで、嘆いて悲観論に陥り、手をこまねいていて平成が終わってしまった感じになっているわけですが、実は、とてもいい社会をつくった結果、少子化になり、長生きになって長寿化、さらには高齢者が増えるという時代に入っているわけで、そうした社会を肯定的に捉えて、適応していくことを考える必要があるだろうと思います。

2030年頃には、人工知能が発達し、現在ある仕事の47%は、人工知能に代替されて、雇用がなくなるとともに、その時代の大学卒業生の65%が、今存在していない仕事に就くと予測されています。そして、その時代を見据え、21世紀型スキルをきっちり身につけておくことの重要性が、指摘されています。その意味で、いわゆる知識を詰め込むだけでなく、

自らが人生を設計し、生き抜いていく力、学び続ける力を学校で養っていく必要があるという議論が、中教審でなされたということになります。

また、昨今指摘されている格差の問題ですが、技術革新の裏側にあるのが、貧困問題です。知識・体験の格差が生まれているということもありますが、もう一つ、経済的な格差がどんどん広がっています。気がつけば、日本は子どもの貧困ということに関しては、世界で最悪のレベルになっています。しかも、貧困は学校教育を通して世代間で再生産されると言われており、その意味で、どこに楔を打ち込んで、子どもたちが自らその状態を抜け出す力をどうつけるのか、それをどう支援するのかといったことが、問われています。

そういった状況が一面でありつつも、他方で自立することが新たにとても強く求められています。この自立というのは一体何かというと、孤立ではない形で、むしろ人々と協働して、自分の人生を創っていく力をつけるということが問われてきているということです。例えば、人の主な死因は、現在はがん、心疾患、脳血管障害というように、従来の外因性で何かに感染して病気になり、治せないから医者にかかるというようなものではなく、むしろ生活習慣にかかわる問題になってきています。その意味では、患者自身が自らを律しつつ、医師はそれに寄り添い指導、助言する役割に変化していくと言われています。

さらに介護も、足りないものを補っていく介護から、むしろ本人の意思を尊重しながら、自立を支える介護に切り替えていかなければいけないと言われ始めています。その意味では、社会的にも個人がきっちりと自らを律して、他者と一緒になって新しい社会をつくる、生活をつくるという形で、自らの在り方を変えていかなければならなくなっています。

もう一つ大きな問題として指摘されているのが、例えば認知症の人々がこれから増えていくことが明らかに予測されており、現在500万人ぐらいの数が、あと5年で730万人となり、高齢者に占める割合の20%を超えられています。さらに40年後には、1,154万人、つまり総人口の13%を超える時代がやってくると予測されています。

さらにもう一つ、つい最近これは政府から打診があったのですが、現在、首相官邸にビジョナリー会議という会議が設けられており、今後20、30年間で実現する技術の検証作業を行うということで、こういうものが実現されることでどんな社会がやってくるかについて、意見を求められる機会がありました。例えば、人間拡張化技術、詳しくは申し上げられませんが、サイボーグ化するということです。そこまでいかずとも、SFの世界のように、ロボットに乗って、戦ったり何かを作ったり、そんな世界が実現する。また2040年の完全移動のユビキタス化や、さらにアバター経由でさまざまなものが実現していく。N高校の

例のように、修学旅行も部活も全部アバターがやってくれるようになっていて、またここでしっかり高校卒業の資格も取れるわけで、そういうものがもっと社会一般化していくということです。他にも、医療アクセスがどこでもできるようになるとか、農水産業の完全自動化、建築工事の完全無人化等が言われています。

こういう技術が実現したとき、どういう社会がやってくるか文系的な立場で議論せよといわれ、そこでは人々の生活時間が変わったり、生活のあり方が変わるということが挙げられています。私自身は、すでにそういう問題ではなくなってくるのではないかと思います。

例えば、医療アクセス技術の進化ですが、厚労省が病院を通して集めた個人の医療データと個人が全て紐づけられています。朝パソコンを立ち上げると、向こうからカメラで撮られていて、異変を察知すると「今日は顔色がよろしくないですね」とアバターが言いながら診断してくれます。紐づけされたデータから、既往症などの情報も踏まえた、的確な症状診断が行われ、さらにそのデータが医薬品会社に届き、そこでオーダーメイドの薬品が調合されてドローンで運ばれてくるようになるということまで、想定されています。

そうすると、自分の健康さらには自分が誰かといったことも全て、一切外部のシステムが決めるようになる時代がやってくるのではないかと、いわば今まで私たちが社会をつくる時に前提としてきた自我や人格すら要らなくなるかもしれない。少し極論ですが、そういう時代がやってくるかもしれないということになります。では、教育は一体何をするのかという話になりかねないような危うさをもたらす技術が、これからどんどん発達するとされているのです。

こういう状況の中で何を考えていけばよいのかということです。たとえば、日本は、極めて高いインフラ整備は終わっており、また人材開発指標も世界4位という高い指標であるわけですが、実は生産性が、先進国でほぼ最下位とされています。しかも、製造業を除きますとギリシャ並みになるとされています。また、ここには書いてありませんが、「人の活力（やる気）」を比べると、128カ国中127位だといわれていて、何でこんなことになっているのか世界的にも分からないと言われる状況になってきています。これは、生産年齢人口の減少、高齢化率の高まりとも、相まって起こっているといわれます。

その将来を見据えた3つのシナリオとして、「1. 生産性を高めてGDPを維持する」「2. このまま途上国並みに落ちていく」「3. 質的に高い三流先進国になる」という、検討・議論があるのですが、実際には、3は不可能だといわれます。

さらに、生産性に果たす要因として、ドイツとフランスの共同研究があるのですが、その中で、アントレプレナーシップが相関係数として、ほぼ一番強く作用すると言われていきます。日本は未だに、アントレプレナーシップを競争と訳してしまうような社会状況ですが、実は競争は、生産性とほとんど相関が無いことが分かってきています。世界的には、格差社会は生産性向上に全く不利だということが言われているわけですが、どうも日本の場合、未だに競争をして打ち勝てば、何とかなるというような議論がなされているようなところがあるのではないかと、それが意味で教育改革の混迷ともつながっているのではないかと思います。

その中で、アクティブ・ラーナー、アクティブ・ワーカーと言われる、いわゆる能動的にみずから探求していく力を持った子どもやさらには労働者、しかもそれは競争して打ち勝つ、または潰し合うということではなくて、むしろ協働していくという関係が重要だと言われるわけですが、もっとも社会全体の価値観がこういう新たな存在を評価する方向に切り替えられていないということがあると思います。

そこで考えなければならないのは、例えば貧困問題で言えば、これは当然お金が関わっているわけですが、お金を与えればいいのかというそうではなく、むしろお金が無いことによって引き起こされている何かが作用して、学力が低下し、それがまた貧困につながっているということが見えてきています。簡単に言えば、お金が無いことによる人間関係の貧困、があるということです。

一例ですが、朝、両親が忙しかったり、ひとり親であったりして、子どもが起きる前に、朝ご飯も十分準備できないまま、家を出てしまったりする。それに対して、テーブルに500円玉が置いてあり、これでご飯を食べなさいと言われ、子どもは朝ご飯も食わずに、それを握って学校に行き、授業を受けて給食を食べて学校が終わり、街でぶらぶらして、デパ地下でその500円を使って揚げ物でも買って、ご飯を食べる。1日ほとんど誰とも口をきかないという生活をしているうちに体を壊し、生活習慣が乱れ、学力が低下して、やる気がなくなるということが起こっているということが、見えてきています。

その意味で、岐阜市の研究でもありますが、自己肯定感をどう高めてやるのかといったことが課題化されてきているわけですが、実は自己肯定感を高めようとして、大人が認め、褒めるだけではだめだということも、言われ始めています。では何が大事かという、実は、私たちの自我や人格や個人の意思は言葉でつくられていて、ちゃんと言葉を使えるような状態になっていないと、実は肯定感が高まらないのではないかと、ということなのです。学力

が低いので肯定感を高めよう、けれど、肯定感を高めるためには言葉がなければ、学力がなければだめだという悪循環になってしまっているのです。やはり、そこを何とか今の子どもたちに、きっちりと言葉を使って自分のことを説明したり話ができる、そうすると大人が分かってくれるという信頼感を社会につくってやらないと、子どもの肯定感が高まらないし、やる気も起こらないのではないかとということが、議論になってきています。

さらに、そうしたことは、実は子どもだけではなくて、高齢者にも言えることだということが、最近のさまざまな研究で分かってきています。特に、社会参加ですとか、人間関係が、高齢者の死亡率に強く関わっていることが、分かってきています。ご飯をおいしいと思えるか思えないか、誤嚥が多いか少ないかといったことにかかわっていて、さらに高齢者の死亡率に関わっていることが分かっています。ご飯がおいしいとは一体どういうことかという、実は「おいしいね」という関係の中でご飯が食べられている人が、ご飯がおいしいのであって、味ではないのではないかと議論が出てきているということです。

今、さまざまな省庁が、国という単位、または都道府県という単位ではなく、学区レベル、さらにその下のコミュニティ・レベルをターゲットにして、自律的な人々をたくさん育成して、彼ら自身が地域を治め、自らがその地域の主役になっていくことで、社会負担を減らそうという政策に転換してきています。とても皮肉なことに、文科省の組織図から社会教育という言葉が消えてしまったのですが、実は最近、総務省と厚労省が、社会教育をやりたいと言ってきています。また、公民館の重要性について総務省も厚労省も、さらに最近では、国交省と経産省も言い始めています。そういう意味では、コミュニティが政策的なターゲットになってきているという面があります。

そういった中で、地域で子どもたちをどう受け止め、言葉をかけて、子どもたちの言葉を豊かに育み、さらに体験がそれを裏づけし、子どもたちが自分の言葉で自分のことを仲間と一緒に表現すれば、大人が分かってくれて、ちゃんとこの社会に居場所があると思えるような状態をつくってやる、そうしたことが大事になるのではないかとことなのです。そこにやはり、教育が向かっていかなければならない1つの目標といいますか、挑戦するところがあるのではないかと考えています。

子どもたちが様々な社会体験をする、さらに競争して潰し合うのではなく協働すること、一緒にやること、さらにその中で自らが言葉をちゃんと獲得して、自己表現し、そうすると大人が分かってくれて、この社会にはちゃんと自分の居場所があると思えるようにしていくこと、自分はこの社会の担い手の一人なのだと思えるような関係性を構築してや

ること、そうしたことが今後の課題、特に地域社会と学校、または子どもたちとの関係で大事になってくるのではないかと、考えているということです。

すみません。一部説明を割愛した部分もございますが、以上となります。ご清聴ありがとうございました。

○田中事務局長

牧野教授、ありがとうございました。では、続きまして、私のほうから、地域の教育力に関係した近年の国等の動向、あるいは本市の方針・取組みについて、資料2に基づきまして、少しご説明を申し上げたいと思います。

表紙をめくっていただきまして、上のスライド1をご覧ください。スライド番号は各スライド右下に記載しております。現在、地域の教育力は、社会教育の主たる担い手としてだけでなく、幅広いソーシャルキャピタルのつながりをもとに、学校教育や家庭教育にも通底し、子どもの教育基盤全体を支える大きな力となっております。

下のスライド2をご覧ください。地域の教育力は、地域資源を生かした多様な学びや体験活動の提供、あるいは子どもと社会との接続点となる活動を踏まえ、心の拠り所となるなど、地域の教育力だからこそなし得るさまざまな役割を担っています。

次のページでございます。まず、上のスライド3ですが、地域の教育力を取り巻く現状といたしまして、国は、新学習指導要領の基本理念で社会に開かれた教育課程を、下のスライド4で、今後の学校と地域の連携、協働のあり方を示した中教審答申、それぞれにおきまして、未来を見据えたこれからの教育は学校内だけで完結せず、学校と地域が連携、協働する社会総がかりでの教育の実現を提唱しております。先ほどの牧野教授のお話とも共通しておるかと思えます。

スライド5をご覧ください。本市もこれらの重要性をしっかりと認識し、地域の教育力の活用を各方針に明確に位置づけ、さまざまな施策事業を実施しております。

続くスライド6では、本市におけるその取組みをご紹介します。1つ目は、ぎふスーパーシニアを活用した取組みでございます。意欲にあふれ、豊富な知見をお持ちのシニアの力を学校の様々な教育活動の充実に生かすとともに、子どもとの関わりが生きがいとなり、シニアの活動意欲がより高まる好循環が生まれ、さらには学校の働き方改革へもつながる取組みとなっております。

2つ目、スライド7ですが、本年度スタートいたしました岐阜未来人財育成事業～ぎふ未

来プロジェクト～でございます。中高生を対象に、アクティブラーニングにより自らの力でその問題解決に取り組むプロジェクト型学習の経験が、次の時代に必要な資質、能力の育成や将来的な地域、社会参画への端緒につながると考えておるところでございます。

その下、スライドの8をご覧ください。今後の地域の教育力のさらなる充実に向けましては、今、そしてこれからを生きる子どもに必要な力とそのための学びとは何かを学校、家庭、地域 みんながコミュニティ・スクールで議論し、理念を共有するとともに、その中で地域が果たし得る役割、機能についても考え、一層高めていくことが必要となっております。

スライド9をご覧ください。昨今、地域社会を取り巻くさまざまな課題によるその結びつきが弱まることで、地域の教育力も低下していると言われております。

そして、スライド10、11でございますが、そうした現状を踏まえ、国は住民の主体的な運営と活動による持続可能な地域社会の形成を目指し、社会教育を基盤とした新たな地域づくりを提唱しております。個人の成長や自己実現に向かう自身の学びから一歩進み、人とともに学び、高め合うことで繋がりや絆が生み出されます。そして、さらにそれら学びの成果や絆で結ばれた協働意識が、人とともに生きる、自らの地域を自ら支える姿に発展していくことを目指しております。

また、その実践の場である地域の社会教育施設をこれからの時代の新しい地域づくりに資する拠点と捉え、さまざまな行政分野の取組みを有機的に結びつけていくことで、より質の高い行政機能を形成することが、期待されているところでございます。

国は今年の6月、こうした発展の可能性や地域の実情を踏まえ、先ほど牧野教授からもご紹介がありましたが、地方公共団体の判断で公立社会教育施設を市長部局にて所管可能とする法律改正を行っております。これら社会教育を基盤とした人のつながりや地域づくりを通して地域社会に活力が漲り、地域の教育力がより力強く確かなものになっていくよう、今後は地方自治体全体でその方策を検討、推進していくことが求められております。

最後に、スライド12でございますが、本日ともにご協議をいただきたい事項として、本日のテーマに沿って、3点お示ししております。

- 1、子どもの生きる力を育むために必要と考えられる取組みとは
- 2、地域の教育力をさらに高めるため、これからの地域に期待する役割、機能について
- 3、社会教育施設のさらなる活用等のほか、地域の教育力の充実に関するご意見、ご提案とさせていただきますが、議論の視点としてご覧いただければと思います。3点に

分けましてご意見を伺うということはありませんが、本日のテーマについて広くお尋ねするため、私からも少し言葉を添えさせていただきながら、委員の皆様よりご意見を賜りたいと考えております。

なお、スライド13は、参考資料でございます。先ほどの公立社会教育施設の所管に関する法律要件について抜粋し、掲載しております。

甚だ簡単で恐縮でございますが、説明は以上となります。

○田中事務局長

それでは、これより委員の皆様からご意見をいただきたいと思っております。本日のテーマ、子どもを守り育てる地域の教育力につきまして、まずはお一人ずつご発言をいただきたいと存じます。

それでは、まず教育長にお願いしたいと思っておりますが、本市は全国に先駆けて、いち早く全ての市立学校・幼稚園にコミュニティ・スクールを導入し、地域の教育力を子どもたちに届ける組織づくりを、積極的に進めてまいりました。こうした強みを生かしながら、今そしてこれから生きる子どもたちのどんな力をどう育てていくのか、また、7月には市内中学校においていじめの重大事態が発生し、本日のテーマには子どもを「守り育てる」としております。加えて、不登校特例校設置を決め、2021年春の開校を目指しております。こうした公教育の今後の方向性等を含めて、展望などのお話をお願いいたします。

○早川教育長

今、牧野先生から大きな絵を描いていただき、大きな物語を語っていただきました。この問題には、医療や認知症やもちろん貧困や未来のあり方など、いろんなことがつながっているということを教えていただきましたが、私は中ぐらいのスケールで語ってみたいと思っております。

学校はもちろん学力向上が大事なことですし、安全・安心な学校であることも重要なことです。その片方で、働き方改革があり、子どものいじめ問題がありということで、様々な問題を抱えているわけです。それが全て、やはり学校だけで解決するという状況にはないわけですし、そういう意味で、学校の自己改革は、もちろん大きな問題ではあるわけですが、それと同時に取り組むべき点は、やはり地域の教育力の活用と家庭教育の入り口としての幼児教育が、重要な施策になると、私は考えています。だから、それぞれ学校・家

庭・地域の連携というのは、そういう意味があるだろうということを思っております。

学校だけというのは、今回の重大事態を見ても、非常に狭い世界で子どもが生活しているというのがよく分かり、そして狭い世界で、子どもが苦しんでいたということです。だから、世界はもっと広くて、未来は君に開けているのだという、先ほどアントレプレナーシップの話もございましたが、そうしたことを示すことが求められているわけで、まず何より学校の先生が、そういう課題を見定めなければならないと思っています。教室の中で、ロッカーを綺麗にするとか時間を守るとか、そういう話はきっとたくさんしているのですが、大きな未来を先生が子どもたちに語り、それを支えていくことが重要です。また同時に、学校の先生以外、それから親以外の大人、それからもっと自然とか学校の友達以外の同世代の仲間とか、そういう人たちとも触れ合う機会が、子どもにはどうしても必要で、その間を飛び越すのは、牧野先生のお話だと言葉の力ということでした。

それは既に、コールマン・プラウデン報告で示されているように、学校の環境よりも先生の質が大事で、先生の質よりも残念ながら親の収入が影響力を持つということが分かっているわけで、貧困の再生産という話も今ありました。しかし、それよりもさらに影響力が大きいのは、親の接し方であり、それと同時に、ここからが興味深いところですが、実は地域の教育力には、親の接し方と同じ力があるということが分かっているのです。

冒頭の市長のご挨拶にあったように、思い出せば特に思春期の頃は、親の言うことよりも親戚のおじさんやおばさん、地域のお姉さんやお兄さんの言うことの方が聞けたという点もあったわけです。岐阜大学の吉澤先生との共同研究で、しっかりそれが証明され、集合的有用感という位置づけ方をされていますが、つまり、1人の子どもに多くの地域の大人が、あなたは大切だよ、あなたのことをしっかり見ているよ、という多くの言葉をかけ、その言葉の力によって子どもたちが育つということが分かってきているわけですし、それをやっていただくというのが、コミュニティ・スクールなのです。

だから、地域を教育の場として、地域の教育力として位置づけていくというのが、コミュニティ・スクールの在り様で、今、牧野先生は大きな絵を描かれました。では次は、それを具体的にしていくわけですが、現在、芥見東小学校をモデルに、東京大学の学生が、学校に滞在しながら、ハートルームという部屋を活用し、地域と学校をつなぐプロジェクトを共同研究として、実施しております。そういった取組みを、今日も校長にたくさん来ていただいておりますが、他の学校へも展開していくことが、そしてそれを岐阜市全体に広げていくことが、大事だということを思うわけです。

しかし、そうした中でも、なおかつ学校という仕組みにフィットしない子どもたちがいるのも現実です。そうした子どもたちを、学校に来なくてもいいよではなくて、行きたい、学びたいと思えるような、居場所としてのもう一つの学校、オルタナティブ・スクールと言いますが、それを岐阜市が設置しようというのが、不登校特例校であるわけです。不登校特例校に子どもたちが来て自ら学ぶ、そんな学校をつくろうというのが特例校の意図であるわけです。

学校教育が進めば進むほど、ある意味、学校というのは狭い世界に落ち込みやすい、力のある先生ほどそうした世界に落ち入れてしまうという可能性もあるわけで、だからこそ地域の教育力がそんな子どもたちを支え、またコミュニケーション能力を高めていく、自己肯定感を高めていく大きな力にもなるということで、引き続き、地域の教育力が光る、岐阜市の教育を作っていく所存でございます。

○田中事務局長

ありがとうございます。では、次に足立委員にお聞きしたいと思います。

地域の教育力は、子どもの能力伸長の側面もあれば、子どもを見守り支える存在でもあるなど、さまざまな役割が期待されていると思います。委員がお持ちの子どもの成長、発達に関する知見から、子どもたちにとってどのような生きる力を育むことが必要なのかなど、ご意見をいただきたいと思います。ご自由にご発言ください。

○足立委員

先ほど牧野先生もおっしゃっていた人生100年時代ということで、少子高齢化ということとは、少数の子どもが多くの人々に囲まれた状態ということです。そんな中で子どもたちを社会全体で教育していくというか、どちらが教育されているのか分からない部分もあると思いますが、そういうことを考えていくのは、非常に大事なことだと思います。

先ほど、認知症の方が増える等、色々なこともおっしゃっていただきましたが、確かに昔は感染症、結核で亡くなるなどそういう時代だったわけですがけれども、今は生活習慣病が高じてや、がんで亡くなる方が多い。確かに、自分が治していかなければならない時代です。介護も自分がある程度やって、その足りないものを周りに支えていただく、そういうような時代になってきたということですが、何と云っても、牧野先生、教育長ともおっしゃいましたが、こういう社会の中でも最終的には、岐阜の子どもに一番欠けて

いると言われている自己肯定感、これを何とか高める、それを本当に目標としていただきたいと思っております。

重大事態につきましても、本当に彼に自己肯定感を与えてあげられなかったのかなということが非常に悔やまれます。もちろん、学力をつけるというのは重要なことではありますが、我々はどのような教育をしてきたのか。学力をつけるために多くの時間を割いて、自己肯定感を奪ってきたというか、与えられないままにしてきて、その結果がこれだということを考えますと、もっと真剣に自己肯定感を根づかせるといいますか、一言で言えば、学校へ行くのが楽しい、そういう学校にしてやらないと、学力テストで岐阜市は結構上のほうだと言って喜んでいる場合ではない、と私は思っております。本当に根本的に、色々なことをおいてでも、そういう学校が作ることを、大きな目標としてやっていっていただきたいと考えています。以上でございます。

○田中事務局長

どうもありがとうございます。続きまして、武藤委員にお尋ねしたいと思います。

委員にも携わっていただいております法教育でございますが、まさに先ほどのお話にもありました「言葉」を使い、対話の中で解決策や相互理解に至る実践の機会を頂戴しておるところでございます。他方、別の観点になりますが、いじめの重大事態の対応など、教育現場においては、教育的対応に加えて、法的対応の重要性が増してきているとも言われております。少し幅が広がってしまいますが、可能であればこうした点も踏まえていただく中で、これからの地域にはどのような学びの機能や役割を期待するのかなど、広くご発言いただければと思います。

○武藤委員

ありがとうございます。先ほどの牧野先生のお話の中で、話せば分かってくれるという信頼感が自己肯定感を強めるというお話が、印象に残りました。やはり話さないと、コミュニケーションをしないと分からないというのは、直感としてはそのとおりだと思いますけれども、では、現在の子どもたちは、話せば分かってくれるという信頼感をどれほど持っているだろうか、というところがやっぱり疑問に思わざるを得ないのかなと思います。

若い方の選挙の投票率が低いと漫然と言われてはいますが、もしかしたら、話しても、自分が何か意思表示しても何も分かってもらえない、変わらないという意識が、若い

人たちにあるのではないだろうか。そういうところから、自分が何かをすることによって何かが変わるという体験を学校教育の中で、あるいは家庭でも地域でもですが、経験できていないのかなということをもむしろ感じています。

「話しても分からないよ」と言う人に、「いや、話さなければ分からない、伝えられない」と私は言います。日本人は以心伝心、そういう気持ちが通じ合えば分かるといった文化を美德とするようなところがあり、私もそれが決して嫌いなわけではないですが、でも、やはり話さないとわからない。他者と他者のコミュニケーション、あなたが何を考えているかというのは、あなたが語ってくれなければ分からない。それは親子であっても家族であっても友達であっても、そういう近い関係であっても、やっぱり最後は話してくれないと、まずは話す、話さないと始まらない、その意識づけは要るのかなと思います。先生方はぜひ、学校教育の中で日々、先生方がこうしたいというものを子どもたちに与えるのではなく、子どもたちの話をちゃんと聞いてください。そういう問題意識を持って、日々、子どもたちと接していただいているだろうかというところは、もう一度それぞれの現場の先生方に振り返っていただくほうがいいということを感じます。

また、話せば分かると言っても、自分の言いたいことだけ一方的に喋って、それで分かるのかといたら、そういうことではない。自分が話し、相手も話す。自分の考えと相手の考えは、往々にして違うことが多いわけですし、その違う考えをどうやって、相手の言い分を聞きながら、でも、自分の言い分も実現させていくのかというところで、利害調整能力というのは、非常にこれからの社会にますます重要になっていくということです。

先ほど事務局長からお話しいただいた法教育というのは、まさにそういう力を育むために有用なツールだと認識してしまっていて、法律というのは、杓子定規に法でこうしなさいと決めるものではなくて、様々な利害関係を持つ人たちのそれぞれの利害をどうやって調整するか、その1つの指針になっています。ですので、どちらかが100%勝ち、どちらかが100%負けるという話ではなく、お互いが譲り合い、よりよい解決を目指すということが、法律の世界で常に行われていることです。まさにそういった法律専門家の知見を教育の中にも生かしていくということで、5年計画の今年は2年目をやっていただいていますけれども、そういう体験を学校教育の中ですることによって、日常生活、あるいは大人になってからいろんな利害対立に直面したときに、自分はどうあるべきなのか、相手の話をどう聞いて、それを調整してどのように解決していくのかという問題解決の論理にもつながっていくのかなというふうに期待をします。私も法律の専門家として、その一

翼を担うべく、これからも努力したいと思います。

あと、いじめの法的対応の話が出てまいりましたが、もちろん法律上のいじめの定義であるとか、そういった点もしっかり踏まえて対応するということは、当然求められるところではありますが、結局いじめというのも、それぞれの子どもたちが、自分はどうしたい、いやどうしたい、私はどうしたいという軋轢がうまく調整できていない、パワーバランスだけで誰かを抑えつけているというところから生じていることが非常に多いのではないかと思います。ですので、先ほどの法教育の話ではないですが、利害調整能力というのは、いじめやそれにつながる問題を解決することにも、寄与していけると思います。

あと、先ほど教育長の話にもありましたが、本当に色々な世界があって、学校だけが世界ではない。そして、学校以外でそれを子どもたちに見せてあげられるのが、まさに地域の教育力なのだと思います。我々は、大人になればそれは分かることですが、子どもたちは、そう言われてもなかなか実感できない。なので、学校教育の中でそういうこれからの未来の世界の断片かもしれないが見て感じてもらって、こういう世界もある、こういう考え方もあるということを知り、それらを自分の中に取り入れる体験など、そういったチャンスをたくさん得られることが、これから大人になり、多様な考え方の人に出会い、さらにはその中で自分を実現していくことを考える、大きな素地になるのかなというように思います。

コミュニティ・スクールが全校に設置されたということは大変ありがたいことだと思いますが、何のためにやっているのか、地域の教育力がどうして子どもたちのために必要なのか、あるいは、それがひいてはこの地域・まちを創っていくために必要なのだという理念を、地域の皆さんにちゃんと共有していただいて、何となく形だけでやっているということではないというところを、何度も何度も再考して進めていけるのが理想かなと思います。さらに牧野先生、吉澤先生にその意義を立証する研究もしていただいているので、その知見を広く共有していくとともに、それを実践し、そういう大きなミッションを担っていただいているのが地域のあなた方お一人お一人なんですよというメッセージを、事あるごとに伝えていただきながら、地域の教育力の更なる能性に期待したいと思います。まとまりのない話でした。以上です。

○田中事務局長

ありがとうございます。では、続きまして、横山委員にお願いしたいと思います。

牧野先生のお話の中にもありました、中教審答申や社会教育法の改正、社会教育施設の所管の変更など、社会教育を基盤としたこれからの地域社会づくりというようなところがございましたが、国の方針や動向も踏まえながら、地域の教育力のさらなる向上、充実に向けて、行政はどのように取り組んでいくか、またどのような取組みが望ましいかなども含めて、ご意見をいただけたらと思います。よろしく申し上げます。

○横山委員

市長の冒頭のご挨拶、それから教育長の先ほどの話を聞く中で、ちょっと昔を思い出したのですが、市長の話されたとおり、多様なコミュニティが昔はあったなど。私は愛知県の過疎地で生まれ育ったのですが、学生の頃、祖父が私に「おい、正樹、ボランティアっちゃ何だ」と聞くわけですね。ちょうどボランティアの芽が出始めた時代です。「いや、じいちゃん、ボランティアって、じいちゃんがいつもやっていることだよ」と、私は答えました。そんな言葉は知らなくても、その当時を思い出すと、何か人が困っていれば、条件反射的にさっと体が動く、そういう世界があったというのを思い出しました。それから、教育長の話の中で、親の言うことより地域や他の人のことという話があったと思いますが、数年前、私が少年野球に携わっていたとき、子どもらは監督やコーチの言うことはよく聞きます。道具の片づけもしっかりやる。それはしつけができたから、家に帰ったらちゃんとやるのかなと思ったら、家に帰ったら絶対やらないですからね。でも、そういうことが大事だというのは、体のどこかにしみついているのだなということを思いました。

それで、地域の教育力という言葉ですが、教育力というのは発揮されなきゃ力ではないです。そういう意味で言えば、力となり得る人であるとか、それから物であるとか、それから自然であるとか、そういう力の源になるものはちゃんとあると思うのです。それをどう生かせるかということが大事なのだと思います。そういうことからすると、さっき私は笑い話みたいに話しましたが、昔と今、違いを考えた場合に、行政としてはやっぱり何かしらの仕掛けというのがそこに必要なのではと思います。よく学校でも素材の教材化という言葉があると思いますが、素材自体はあるので、それを教材化するためには何かしら行政的な仕掛けが必要だということを思います。

それで、子どもの生きる力を育むため、必要な取組みというような課題もありましたが、やっぱり私は、子どもはいろいろと体験する、多様な体験といいましようか、それが非常に大事だと思います。それによって視野も広がるし、それから地域に対する愛情というも

のも深まるだろうし、そういったことを学びながら、自分なりに将来どういうふうにしていくかという、夢ができていくと思うのですね。夢というものを自分が持つと、そのために頑張ろうと思う。今日できなかったけど、明日頑張ろうと。ということは、夢を持つということが、明日頑張ろうという生きる力につながっていくと思うので、そういう点からすると、子どもには地域の中で色々な経験、体験を積ませることが大事だと強く思っています。

では、行政が行う取組みとして、何が考えられるかといえば、私は土曜日の活用があると思います。土曜日は学校ではなく地域で学ぶ日にするというようなコンセプトで、行政で何か仕掛けていくことも一つの手法だと思います。

それから、できてからも十数年経ちますが、総合学習です。当時、総合学習ができるころ、当時の文科省初等中等教育局長は、これは現場の先生方に対するプレゼントであり、先生方、大いに創意工夫して自由に使ってくださいと言いました。それが学校現場で今、どういう使われ方をしているのかというのを私はよく聞いてみたいのですが、社会に開かれた教育課程や教科横断的な取組みということが盛んに言われている中で、総合学習をいかに有意義に使うか、有効的に使うかということが必要なのではと思います。

それから、地域の教育力を高めるべき地域の役割として、岐阜市は全国に先駆けて全校にコミュニティ・スクールがあるわけですが、そのコミュニティ・スクールが実際どうなのかという点です。例えば、この重大事態が起きたとき、コミュニティ・スクールはどういう取組み、動きをしたのか、それが重要だと思います。コミュニティ・スクールを構成する人をいかに束ねて力にしていくかということが求められているわけで、各コミュニティ・スクールに対して、特徴的に、積極的に取組みをしているところには予算を多く措置するというようなことをやってもよいのでは、と思います。

そういったところに予算化すれば、より高い効果が私は生まれると思うので、市が主導する中央発信型のプロジェクトだけでなく、現場から上がってきたアイデアを積極的に具体化する、そんな取組みも仕掛けとして考えられるのではと思っています。以上です。

○田中事務局長

ありがとうございました。本日は、何人かの校長先生にもご参加いただいておりますので、後ほど今の総合学習のご意見も踏まえて、校長先生にもご発言をいただければと思います。

続きまして、伊藤委員にお願いしたいと思います。保護者としても子どもの教育に関わられる中で、今そしてこれからを生きる子どもたちは、その過程でさまざまな困難に直面するわけですが、未来を担う子どもたちに身につけてほしい力とは何か、またその成長を支える存在として行政、地域、さらには家庭でできることは何かなども含めて、ご意見をお願いいたします。

○伊藤委員

ありがとうございます。スライド1の図、これが本当に私は分かりやすく良いと思いついて見せていただいたのですが、観光も同じだと思います。観光業で言えば、中心はDMOになるかもしれませんが、一昔前のソーシャルキャピタル、社会資本とはインフラやハードが挙げられておりましたが、やはり今は人とのつながり、目的が同じ仲間やそうした有機的なつながりこそが地域を良くしていく、その原動力になるということはやはり教育も観光も同じであり、この図を皆が頭に思い描きながら、地域が、地元の人が教育も支えるということに徹していく社会になっていただきたいと思い、拝見していました。

昨日、子どもの習い事のプリント学習のテストが返ってきました、通常のテストとは別に、今学ぼうとする力が数値化して出てくるのですが、それは全部アンケート形式で行われています。例えば、毎日勉強を何分していますか、本は1週間にどれだけ読んでいますか、家でお手伝いしますかといった項目です。

先ほど教育長もおっしゃったように、家庭の中での親の接し方がこれらの力に関わってくると私自身も思っていました、項目の中には、まちづくりや地域の活動に参加していますかというものもありました。今の議論のとおり、これらも子どもが学ぼうとする力に強く関わってくるということを、そこでも改めて感じた次第です。

また先週、子どもの通う小学校で全国大会がありまして、そちらでコミュニティ・ティーチャーとして参加させていただきました。1、2週間前からその打ち合わせ等で頻りに学校を訪れる中で、本当にいい学校だなと先生方に改めて感謝の思いを持つとともに、どうしてそう感じたか考えてみますと、本校がコミュニティ・スクールの設置第1号で、10年経ち、地域の方が当たり前にも出入りされています。授業を地域の方が見に行ったり参加したり、また子どもたちが地域のお店を訪問させていただいたり、他の学校と比べ、関わりの機会が多いと思います。それが10年繰り返され、本当に学校自体が良くなってきています。地域の力がやはり学校に入ることにより、子どもたちの姿も変わって

くる。私が歩くと、当たり前のように、こんにちは、こんにちはって挨拶したり、「何々ちゃんのお母さんだ」と言って慕ってくれたり、そういったことが自然に行われる学校の姿は、コミュニティ・スクールを10年続けた成果として現れていると肌で感じます。

授業に参加させていただき思ったことなのですが、子どもたちが私の話の中で、とても目を輝かせて学んでくれたことが、2つあります。

一つは、岐阜市の特性や強みをきちんとお話したときです。小中学生はこれから自分の大切なアイデンティティを形成する、大事な時期だと思うのですが、そこで正しい、地域の新鮮な情報をインプットさせてあげてほしいと思います。

『ええとこたんと』という市の広報冊子がありますが、かなり作り込まれた素晴らしい冊子だと思います。そこに岐阜市の強みなどが書いてあるのですが、今は成人式や大学入学式のときなどに、配っていると聞きしました。それをぜひ、小中学生にもどこかの時期で、配っていただきたいと思います。そしてそれを用いて、1時間や2時間でもいいので、岐阜市から広報の方かどなたかが説明に来てくださって、子どもたちがそれについて知り学ぶ時間があるとよいと思うのです。例えば他言語、他の地域・国の文化など、これから比較対象になるものがどんどん増えてくる子どもたちにとって、そこで比べる自分たちの文化や礎が分からないまま、比べてしまっただけでは意味がないと思います。ですから、その礎として、自分たちが生まれ育った場所がまず一番に来ると思いますので、そのアイデンティティを形成するためにも、そうした事業を1つ加えていただきたいと思います。小学校5年生で鶺鴒に乗ることも大変ありがたいことだと思いますが、それにプラスして、小学校高学年から中学生に当たる時期に、そういった授業を入れていただくことで、市長がいつも言っているしゃるシビックプライド、小中学生が大変低いのは、比べるものがないからだと思うのですが、そこを上げていく意味でも、ぜひ取り上げていただきたいと思います。私が短時間話しただけでも、子どもたちは本当に「そうなの！そんないいところがあったの！」と気づいてくれることができたので、そうした授業が、きっとそのきっかけになると思います。

もう一つは、今の子どもたちの世代は、フィールドが当然、世界視野、ボーダーレスになってくると思うのですが、とはいえ、いきなり小中学生で世界の話をして分らないと思います。私たちの携わる観光もそうですが、世界を考え、世界を見ながら、でも地元で仕事をしている人がたくさん岐阜市にもいらっしゃると思います。いわゆるグローバルな仕事をローカルで担っている、そういったお話をさせていただきました。世界のビッグ

データを取りながら、観光業が動いていることをお話しさせていただいたら、それについても子どもたちはとてもびっくりして、喜んでくれました。ですから、教科書に出ていることが、現実の身近な世界で、地消としてこの地元で起こっている、それを肌で考えさせてあげることが、今の子どもたちには大切ではないでしょうか。

そして、社会の課題解決というのは、やはり大人の仕事だと思います。それをどのように解決しているのか、これも子どもに見せてあげることが重要だと思います。観光業で、時代とともに団体旅行が少なくなり、個人客にシフトしていく判断を迫られる中、私たちはどう経営の舵を切ってきたかという話などは、子どもたち一人一人が大変興味深く、まるで自分が経営者になったのではというぐらいの良い発言をしてくれていました。そうした社会の課題解決を、実際、子どもに話してあげることも大切だと思います。

これからAI時代が来るうえで、残っていく仕事というのは大きく分けて2つ、人と関わる仕事、そしてクリエイティブな仕事になってくると思います。

人と関わる仕事、これはやはり学校教育や社会において育てていかなければいけない力だと思います。これができないがゆえに、心が折れてしまい、それでなかなか思うように前へ進めない子どもたちもたくさんいると思いますので、人と関わる力をできるだけ、地元力で身に付けていってあげたいと思っています。よろしく願いいたします。

○田中事務局長

ありがとうございました。『ええとこたんと』は、本当にシビックプライドの塊のようなものでございますので、早速、小中学校へ配布できるように進めたいと思います。

それでは、次に市長からどうぞよろしくお願いいたします。

○柴橋市長

本日は、教育委員の皆様方、それぞれのお立場から貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございます。『ええとこたんと』、本当に今回、これでもかという位、力を入れて作りましたので、今、私の自己肯定感も大変高まっております。またそれは、作成に携わってくれた職員も同じだと思います。

実は、そういうことなのだろうということを思うわけです。特に子どもたちの中で、例えば先日、ぎふ市民健康まつりがあり、岐阜市長賞で表彰させていただいた、口をがーとあけている子どものポスターがありました。本当に見るからにこれが一番だなというぐ

らの表現力なのです。また、表彰式の後、一緒に写真を撮ってほしいと、受賞したその子に声をかけていただいたとき、その絵の魅力や迫力について子どもにすごいねと伝えると、本当ににこにこ喜んで、お父さんと一緒に帰っていかれました。まさに社会の色々なところで、特に地域の皆さんから、子どもたちがそれぞれの一生懸命頑張ったこと、努力したこと、それはどんな小さなことでも、声をかけてもらうことによってすごくいい顔をするし、その喜びを知った人は、またその喜びを味わいたいと思い、さらに努力できるのだと思います。

今、皆様方のお話を聞きながら、非認知能力を高める取組みというのは、実は既存の事業の中にも色々あるということを実感しておりまして、例えば、先日、このメディアコスモスで開催されたショートショート発表会に、子どもたちが大変緊張しながら、それでも、直木賞作家の朝井リョウさんの前で朗読しご講評もいただける、これは最高の自己肯定感につながると機会だと思えます。

また、これは本当に嬉しかったのですが、先日、友好都市である杭州市が40周年を迎え、子どもたちと一緒に訪問しました。後日、そのときの生徒の1人が、私に手紙を書いてくられまして、昼休みにこれを読んでいました。市長と少しでも話ができて良かったという内容の手紙だったのですが、訪問時、子どもたちは副市長はじめ関係者の前で、中国語で堂々と発表するとともに、歌を歌ったり踊ったりしました。また、中国の子どもたちもそれに応えるように歌や演武を返してくれました。この交流も最高の自己肯定感の高まりですし、非認知能力につながる事だと思えます。他にも、夢プロジェクトによる交流事業も全く同じことが言えると思えます。

さらに、先日、加納幼稚園の子どもたちが一緒に丸窓電車を引っ張り、お披露目してもらいましたが、子どもたちは電車の中に入ったり運転席に座ったり、賑やかに楽しんでいましたし、何よりも保護者の皆さんが大変嬉しそうで、一生懸命写真を撮っておられました。そうやって子どもたちが、この丸窓電車という歴史のあるものに直接接触り、また音を鳴らしたりしてくれたことで、きっとこの子たちは生涯、丸窓電車のことを忘れないだろうし、今度、JR岐阜駅前へ移設しますが、そのこともずっと覚えていてくれて、将来、自分が親になったとき、自分の子どもにそれを伝えてくれるのではないかと思っています。

ですから、地域のまさに力というのは、今、特徴的な取組みを述べましたが、地域の皆様との色々な関わりの中で、ある種そこでしか味わえない、体験できないこと、声をかけていただけることが教育の中に溢れ、さらにそれがどんどん進んでいけば、決して自己肯

定感が低くなることはないのではと思いますし、他の生徒に対する、相互承認と真逆の行動は起きにくくなってくのではないだろうか、ということをおもいます。

牧野先生の資料中、将来的な地域コミュニティや地縁組織において、自治会加入率は大変低い設定になっていますが、これはとんでもない社会で、それらを補うものとして多様な小さな社会があると述べておられました。小さな社会がたくさんあることにより、人というのは、地域の中で構成されていくということをおっしゃっているのだと思います。

図らずも、現在、市内各地域のまちづくり協議会や自治会の皆さんとの懇話会を行っており、先日、自治会の加入率が下がってきているのを市長はどう考えますか、と問われた中で、まさに私はこのことを話しました。ですから、地域の小さな社会、例えばおやじの会とかも大事な地域の宝だと思いますが、どんな集合体・コミュニティでも、これがどんどん、どんどん例えばまちづくり協議会の中に参加していただき、その総合力で、子どもたちを地域全体で育ててもらいたいなということをお願いわけですし、コミュニティ・スクールも今、横山委員、伊藤委員の両名からいただいた、現在の活用状況や校区ごとの差という問題提起を受けた対応にも、取り組んでいく必要があると思います。

私も同じ問題意識を持つ中で、例えばまちづくり協議会というものの中に、コミュニティ・スクールというものが位置づけられているとすれば、まさに自治会・各種団体・小さな社会から、多様なコミュニティの皆さんがこのコミュニティ・スクール、子どもたちのことに関わっていただけるし、力も貸していただけるというように、今既にそれに限りなく近いところもあるのですが、地域によって差があるとすれば、そんなこともこれから本気で考えていく必要があるのではということをおもったりもしております。そしてまさに、その拠点としての社会教育施設、まちづくりの拠点ということも考えたりしているわけですが、この多様な小さな社会の拠点が社会教育施設にあり、その拠点によって子どもたちが支えていただけるということも、大いに意義があると思います。

あと最後に、学校というものを見たとき、今でも同窓会をやったりしますので、これはもちろん良き仲間ではあるのですが、先ほど教育長がおっしゃったような、学校という世界においては、同じ年の、要は同じ時代を生活しているところだけのコミュニケーションに非常に偏るわけですし、そこに1つの狭さというものが生まれるとするなら、地域の方とは、まさに自分のおじいちゃん、おばあちゃんの世代の方とのコミュニケーションですし、学校の中においても縦のコミュニケーションということ、きちっと意識していけるような環境づくりとか、そういうことも大事ではないかと思ひます。今、どうしても同じ世代

の画一化されたコミュニケーションの中に子どもたちが閉じ込められてしまっているのではないか、という問題意識も持ちますので、そういったこともこれから教育委員会の中で色々と議論いただきながら、どう多様なコミュニティを学校、地域、社会の中で育てていけるかということについて、ぜひお知恵をいただければありがたいと思います。長くなりましたが、以上でございます。ありがとうございました。

○田中事務局長

ありがとうございました。まず、お一人ずつご発言をいただきましたが、まさにそのところの地域の教育力のあり方におけるコミュニティ・スクールの可能性、あるいはまちづくり協議会への集約的な方向性、ぜひまた議論をしていきたい重要な示唆が多数ございましたが、さらに議論を進めたいと思います。

ご発言のある方は、ぜひ挙手をしていただきたいと思います。先ほど伊藤委員より、コミュニティ・スクールで普段から地域の方々が、学校へ足を運んでいただけるというお話がございました。今、芥見東小学校でスーパーシニアの力を活用し、ハートルームという場所を起点とした地域と学校のあり方というような取組みをしているところでございます。少し議論が狭くなるかもしれませんが、学校に地域の方々が頻繁に訪れていただけるというお話に関連し、私もそういった取組みを拝見する中で、学校に地域の方々がもっと入り込んでくる、それこそ授業など様々な活動の中に地域の方が入り込んで協働してというようなことが起こると、非認知能力あるいは自己肯定感の高まり、さらにはいじめや不登校、そういったことに悩む子どもが、確実に減るのではないかと。昔の原体験のお話なども含めて、そう思うところです。

先ほど少し触れましたが、本日、校長先生にも何人かお越しいただいております。ぜひそういった取組みで、学校、子どもはどう変わっていけるのか、また、先ほど横山委員から総合学習についてのご意見もございましたが、それも含め、学校での現在の取組みなど、代表して、芥見東小の近藤校長先生にお話いただけたらと思います。

○近藤芥見東小学校長

芥見東小学校の近藤です。よろしくお願いたします。本校も自己肯定感が低いという課題がありまして、私の中では、自己肯定感を高めて意欲的になることで、それが学力の向上につながっていくのではという仮定を置き、これまでずっと取り組んできました。

まず地域の方と子どもが触れ合える場として、昨年度、校内にハートルームという場所を設置しました。そこで今、様々な活動が起きているのですが、例えば、今年は教育課程の中に、ハートルームの運営に携わるクラブ活動を位置づけました。今日来ていただいている小椋さんもそうですが、地域の方を招く給食交流会をどうやってやろう、という子どもたちの相談に乗ってくださり、意見を引き出してくださる。そうした場で、子どもたちは色々な意見をどんどん、どんどん出していき、それをまた地域の方に褒めていただくので、子どもたちは本当に意欲的になって、普段の授業でこういう姿や顔を見せるかなというぐらい、すごく伸びて本当にありがたく思っています。

給食交流会の他にも、百マス計算大会などをやっているのですが、そういう場面でも地域の方と触れ合うことにより、本当に意欲的に取り組んでいる様子が見て取れて、地域の方々の存在が非常に心強く、学校としてもとても助かっています。

一方、先ほどの教育活動の中に地域の方が入ってくることに关しては、この前1年生が生活科の学習で公園に探検に行きましたが、そこで担任から、地域の方のサポートをお願いできないでしょうかという話があり、地域の方をお願いすると、「いいよいいよ」と快く引き受けてくださいました。また公園では、子どもたちが地域の方と、こんな大きいカマキリがとれたよ、緑色だね、どこにおったの、草の中に紛れているね、というように言葉を交わし合う中で、色々な学びが生まれていました。こうやって、地域の方に活動を一緒にやっていただくと、先生に褒められるよりも、もしかすると地域の方に褒められたほうが嬉しいのではということをおもっています。

それから、総合的な学習についてですが、芥見東小学校の南には、山田川という川が流れていまして、そこに蛍が生育しており、その保全活動や蛍の生育などについてハートルームで地域の方から説明を受けることで、子どもたちが地域についてどんどん詳しくなっていく、意欲的に活動に参加しています。また地域にとっても、地域の自然や活動の継承に繋がっており、まさにWin・Winの関係ができています。

今考えているのは、現在、ハートルームが常時開設しているわけではないので、週に1回でも地域の方にコーディネーターとして来ていただき、学校と地域をつなぐことを実践いただきたいと考えております。

東京大学の皆さんがハートルームの活動に携わっていただく中で、本当に地域と学校が近くなったということを感じておりますし、地域の方に子どもたちの自己肯定感を伸ばしていただいております、感謝しております。

○田中事務局長

ありがとうございます。本日は芥見東地区の山田自治会連合会長もお見えになっておられますが、もしよろしければ何かご意見、ございますでしょうか。

○山田芥見東自治会連合会長

はじめまして。私は、芥見東自治会連合会、まちづくり協議会、公民館、それぞれの長を兼ねておりまして、今日はこちらの会議への参加を依頼され、参りました。

岐阜市主導で今、まちづくりのアンケートをやっておりまして、わが地域はすぐ手を挙げて、アンケートを取りました。このアンケート項目のうち、あなたの年齢は何歳ですかという問いですが、芥見東は県内随一の団地で、70歳代がとても多いです。また高齢夫婦のみの世帯が多く、有効回答の39%、281軒です。もう一つ、現在の場所に住んで20年以上という方、これも多くて有効回答の86%、618軒です。

言いたいのはここからなのですが、芥見東は高齢化率41.6%で、市内で1,2を争う高齢化が進む地域で、アンケートの問いの中に「子どもたちを健やかに育むため、みんなで取り組むとよいことは何ですか」という設問がありました。そして、返ってきた回答で一番多かったのは、放課後や休日の子どもの居場所づくりに取り組むというものでした。これは本当に嘘も隠しもない事実で、地域の多くの方がそう思っているということなのです。

今、芥見東で取り組んでいる牧野教授との共同研究、ハートルームの活動も、そういう考え方の基にいけば、方向性としては合っていると思います。今後どうするかは、校長先生をはじめ、スーパーシニアの会議で話をしながら進めていくのですが、私がふと思ったのは、放課後、やっぱり子どもたちが帰っても親のいない家庭というのがあるわけです。また、休日も親がいない家庭もあると思います。そういう子どもたちがハートルームに来て、シニアと交わることで、何らかの形でつながりをつくることができると思いますし、それが一番大事だと思うのです。

今、芥見東地区の高齢者、特に定年退職後の男性、これがなかなか地域に出てきません。多分、岐阜市も日本も同じような状態だと思うのですが、男性というのはなかなか地域に出ることをせずに、家で過ごしている人が多いと思うのです。女性はやはり子育てで奥さん同士、ママ友がずっとママ友のまま同じ年齢を重ねていき、地域でのつながりや交流があるのですが、男性は残念ながら、そういった関係値を持っていない方が多いわけです。

私はたまたま、自治会の支部長をやったことがきっかけで、そこから時を経て連合会長になったのですが、それからずっと自治会のことに携わっております。

子どもと高齢者、これがやっぱりキーポイントだと、本当にそう思います。やはり皆さんの地域でも同じような状況だと思うのですが、特に私たちの地域はそれを地域課題として正面から捉えて、取り組んでいます。昨日も徳島から議員の方が視察でいらっしやり、そういう話を1時間位しました。私たちの取組みを評価いただいて、また他からも視察にいらっしやったりされます。

先ほど、市長の話の中で、まちづくり協議会がコミュニティ・スクールを担う可能性というお話がありました。来年度、芥見東地域では、まちづくり協議会をNPO法人化しようと考えています。というのは、空き家がだんだん増えてきており、その管理を、謝金をお渡ししてシニアにやっていただく。何らかの形で、地域に出てきてもらおうと考えています。またそこから発展し、ハートルームにも携わっていただくなど、その活動の輪を広げていくきっかけとしても、活用できればと思います。

私の隣に、ハートルームサポーターとして地域、そして子どもたちにとっても深く関わってくださっているシニアがいらっしやっています。代わってお話しさせていただきます。

○小椋芥見東ハートルームサポーター

すみません、小椋といいます。よろしく願いいたします。芥見東小学校にハートルームができて、今年の4月からひよんなことがきっかけで、出入りするようになりました。先ほど委員さんからもいろいろとご発言がありましたが、私も小さいときにはやっぱり地域のおじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんに色々と教えてもらって育ったなということを思い出しております、何とか3世代の交流社会を芥見東地域で、その取組みをハートルームで実現できないかというところが、私たちの思っていることです。

団地ですので、大体は自分のおじいちゃん、おばあちゃんがない若い世帯がそこに入り、子どもを育てましたから、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に育ったという子どもは、非常に私たちの時代には少なかったのです。だから、そういうことを考えますと、やっぱり当時の地域の皆さんに育ててもらった、教えてもらった心というのは、今でも生きておられると思っております。そして今度はそうやって、自分たちが子どもと接する機会を、ハートルームでできないだろうか、それが私の今一番思っている願いです。

悩みは今、もっとハートルームに皆さんに来てほしいということです。連合会にも力を

入れていただき、地域の多様なノウハウを活かし、バラエティに富んだハートルームの活動を、子どもとともに生み出せるようになればと思っております。子どもたちが何をやりたいかということを探り、そのことの専門家、例えば刺しゅうしたいと言ったら刺しゅうの先生を入れて一緒にやる、書道がしたいと言ったら書道の先生が来る、踊りをしたいと言ったら踊りの先生を呼んでくるというように、バラエティに富む、文化的な部分も含め学校では教えてもらえないことを、ハートルームで何とか実現できたらなど、思っております。どうもすみません。

○田中事務局長

ありがとうございました。予定時間を過ぎ、進行が少し遅れており申し訳ございませんが、少しだけ延長させていただきまして、今、芥見東の取組みについて、校長先生、山田会長、そして小椋様からのお話をお聞きすると、子どもたち、学校、地域のシニア層それぞれに十分、ニーズやポテンシャルがあるということがよく分かりました。今のご発言をお聞きし、何か補足等はございますか。

○伊藤委員

ハートルームが画期的な場所となり、活動が生まれているということで、ぜひまた参考にさせていただき、岐阜市の教育に役立てたいと思います。ありがとうございます。

○田中事務局長

ありがとうございました。皆様からさまざまなご意見を頂戴しましたが、最後にもう一度、教育長それから市長に総括的にご意見いただきたいと思いますので、まず教育長、お願いいたします。

○早川教育長

ありがとうございました。自己肯定感が大変問題になっておりましたが、自己肯定感と関係あるのは、先生に褒められるかどうかということが、非常に大きいです。先生が褒めていると思っているほど、子どもは褒められていると思っていないという点があります。ですから、ぜひもっともっと褒めてくださいということです。

それから今、私が非常に興味を持っているのは、エピジェネティクスの話で、全部の細

胞の中にDNAは誰でもあるわけですが、遺伝情報として使っているのは2%だけだそうです。残り98%は、医学用語でごみと言うそうですが、実は、そのごみの中に才能のスイッチがあるということが分かり、その才能のスイッチは2万個ぐらいあると言われていています。誰でも、例えば音楽が得意なスイッチはあるのですが、それがオンになるかならないか、それによってその人の運命は決まると。だから、運命は自分で決められると今言われているそうです。

では、そのスイッチをどうやってオンにするかという、やはり好奇心や面白さ、楽しさを、子どもも大人も持てるかどうかです。そして、そこにやはり自己肯定感が大きく関わってくるので、岐阜市の施策として、どれだけ多くDNAの才能スイッチをオンにさせる機会をつくるかということなのです。また、そうした機会を特定の子だけが享受するのではなく、全ての子に可能な限り多くのチャンスを与えることができるようにすべきで、そのスイッチオンの機会を多数創出するには、やはり地域の方々の力が何より重要なのです。

それから、今まで論議している中で、私はやはりアゴラをどれだけ活用するか、小中学校のうちに、アゴラでの経験をどれだけ積み重ねることができるか、非常に大きなテーマになってくるだろうと思いますので、ぜひ校長先生方には、アゴラの積極的な活用を図りながら、今日の話を実現できるよう、率先して取り組んでいただきたいと思います。お願いいたします。

○田中事務局長

市長、最後によろしくお願いいたします。

○柴橋市長

長時間にわたりまして、貴重なご意見をありがとうございました。先ほど少し触れ損ねてしまったのですが、横山委員から土曜授業のあり方ということで、問題提起をいただきました。私も学校の先生方から、特に土曜日、習い事等の関係で出席率の問題があり、土曜授業の中でも授業を進めにくいというような声を聞いております。したがって、この土曜日の学習というのをどうしていくかというのは、今後の教育委員会の中でも重要なテーマではないかなということを思いますし、様々な教育施策の中で、先ほども一部例示しましたが、とても素晴らしい事業があるわけです。明らかに、非認知能力の向上や本人の意欲など、成長につながっているのです。

ただ、どうしてもそれは、先ほど教育長も図らずもおっしゃったように、特定の子、あるいは一部の子に限定されてしまうということになっていきますので、これをどう水平展開していくか、まさにそこに地域の力が必要になるのではないかと考えております。

ぜひ今後とも、教育委員の皆様方で色々な意見を出していただき、より良い教育を共に築いてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。今日は、ありがとうございました。

○田中事務局長

ありがとうございました。本日は様々多くのご意見を頂戴し、重ねて御礼申し上げます。これからの時代、教育のみならず防災、まちづくりなど、地域には重要かつ多様な機能がなお一層求められてまいります。そういった中で、地域は、学校とともにその主要なアクター、アクトレスであるわけでございます。さまざまな機能の水平展開、横展開、大変大事でございます。また、関連しますが、地区公民館の市長部局への移管についても、市民参画部と協議、検討を進めているところでございます。

本日いただいたご意見を十分に参考とさせていただきますながら、われわれ教育委員会、行政がしっかりと施策に落とし込んで、地域の教育力の向上のお手伝い、支援をしていかなければならないのはもとより、今後も連携を図りながら、それぞれが役割を全うできるよう、引き続き努めてまいりたいと思います。

予定時間を超過し、申し訳ございません。本日の会議録につきましては、後日、岐阜市のホームページで公開を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、これもちまして、令和元年度第2回岐阜市総合教育会議を閉会といたします。本日は、誠にありがとうございました。

(15時00分閉会)